

「ジャーナリズムは社会的弱者に焦点をあてよ」 2021年02月15日

『週刊金曜日』の2月12日号の「論考」に、私の投書が掲載されたので、転載したい。

《日本ジャーナリスト会議(JCJ)が出している月刊紙『ジャーナリスト』の1月号。1面に掲載されたJCJ代表委員の吉原功氏による「何を見て何を伝える ジャーナリズムの課題は」の論考に感銘を受けた。

童謡詩人の金子みすずは「昼のお星は目にみえぬ。見えぬけれどももあるんだよ。見えぬものでもあるんだよ」と歌っている。また、「朝焼け小焼けだ、大漁だ、大羽いわしの大漁だ、浜は祭のようだけど、海の中では何万のいわしの釣りするだろう」という作品もある。

吉原氏は、ジャーナリストが「見る」べきは、「浜の祭り」ではなく、「いわしの釣り」ではないかと指摘する。安倍晋三前首相の「桜を見る会」は、「祭り」としか見てこなかった。背後に潜む闇を見なければならぬのに、それを見逃してきた。

ジャーナリズムの劣化が多面で論じられている。ジャーナリストたちが自分たちのジャーナリズムの劣化をあげつらうのを不思議に思うが、事実として劣化していると言わざるを得ない状況にある。劣化は、国民の知る権利の侵害であり、民主主義の危機につながることは、言うをまたない。

首相の記者会見は、限られた記者の出席しか認めず、質問も1人1回と限定。時間も「後の公務がある」と短時間で終わる。「政府広報の場」となり、事実の究明からは程遠い。安倍晋三長期政権、それを受け継いだ菅義偉政権は、ジャーナリズムを懐柔し、圧力を強めている。企画したテーマを政府の意向により、放送を中止させる。突っ込んだ質問などをしたら、恫喝され、萎縮するケースが後を絶たない。このような流れに抗し、事実を迫ろうとするジャーナリストもいるが、彼らは次第に発言する機会を奪われている。政府を代弁するジャーナリストたちが毎日、物知り顔でテレビに出て、新聞に執筆している。聞きたいジャーナリストの声を聞こうとすると、相当の努力がいる。

新自由主義経済は、1%対99%にという途方もない格差を生み出した。コロナ禍は、人間が生物群の生息環境に手を突っ込んできたことへのウイルスの反撃であるとの指摘もある。その感染爆発は最下層を直撃し、悲劇を増幅している。

吉原氏は、米大統領選挙は最下層に追いやられた人々がトランプ的な人物を支持していることが明らかになり、この現象が日本社会にも及んでいると分析している。いわば、叩かれるはずの人々によって、祭りが盛り上げられている、という構造である。

社会的弱者にどう対処しているかが、その国の文化度であり、彼らの生存を支えるのが政治の使命であるはずである。隠れて見えなくされている部分をクローズアップするジャーナリズムが求められている。『週刊金曜日』の活躍に期待したい。》

私たちは情報の洪水の中で、何が真実で、何が重要なのか判別できずに押し流されている。私は、学会の任命拒否問題が、極めて大きな出来事だと思っている。政府は拒否の理由を説明できないでいるが、誰が見ても、政府の政策に異議を唱える有力な学者たちが排除されている。国民の心の中に、権力の手が直接、差し込まれたような恐怖を感じる。拒否された学者に指導を受けている学生たちは、どのような目で見られるであろうか。原発に反対する人々は、原発問題から排除される傾向にあると聞く。社会を揺り動かすような情報が絶え間なく流されているが、任命拒否問題は、日本の政治の曲がり角になるのではないかと、深く危惧している。